

過（か）

Twitter の毎日新聞電子版に『『生きる力を伸ばす』園舎造り』というツイートがあった。

～過保護な設計に一線～

ある設計事務所が、子供にケガをさせないように最大限に配慮した“過保護”な園舎設計に一線を引き、あえて段差や死角を取り入れた「子供の生きる力を伸ばす」園舎造りを提案し、実際にこの提案による保育園があるようだ。

最近、万全の注意を注いで運転しなくてはいけない自動車が、危険回避、事故防止のため、安全装置が充実し、素晴らしい性能である。

一方、運転が容易になるせいか、ながら運転や高齢者の運転による事故が多発するという矛盾が生じている。これも一種の過保護なのだろうか。

さて、最近、大学のある先生から、以下のような話を聞いた。

「10000のデータを分析するとき、3000のデータで仮のモデルづくり、98%の正確さを出すモデルをつくったとする。

そして、のこり7000のデータで検証（動作確認）を行う。

すると、80%程度の正確さがでるそうだ。

3000でイメージがつくられてしまい、7000の内、イメージ以外のデータに出くわしてしまうと、戸惑ってしまうそうだ。

これを『過学習』という。

しかし、3000のデータで95%ぐらいの正解を出すモデルをつくると、7000のデータにイメージに合わないものが出てきても対応できるらしい。」

勉強させすぎると、イメージが固定化され、例外に対応できないこともあり、いい結果が出るとは限らないようだ。

『やわい学習』程度がいいらしい。

さて、今回は「過」がテーマである。

やり過ぎ、させすぎ、は最善とはいえない。

新学習指導要領案が目指すのも、解がない時代に対応できる人材育成である。

どの様に学ぶのか、どのように指導するのか、に対するひとつの解かもしれない。